

# 巻 頭 言

別府大学日本語教育研究センター長

松 田 美 香

別府大学日本語教育研究センターは2009年4月に設立され、今年で12年目を迎えます。研究のための『別府大学日本語教育研究』も本号で第11号となります。

令和2（2020）年度は新型コロナウイルス感染防止のため、「日本語教育講演会」を開催しませんでした。それだけでなく、本センターのおもな行事である「スピーチコンテスト」「朗読コンテスト」「第2次オリエンテーション」の開催も自粛せざるを得ない状況でした。そして、今なお、その状況が収まるかどうかが見極められない状況が続いています。

本学では、昨年度後期に入国できないままの留学生に対し、オンライン（多くはリアルタイム）で日本語科目の授業を行いました。本センターの先生方は、遠い母国からオンラインで参加している学生を含めて、対面授業に近い授業法を模索しながら日々の授業を進めてくださいました。すべてオンラインの授業もそれなりに大変ですが、対面授業を行いながら、リアルタイムやオンデマンドでの授業設計・実践は、先例がなく、失敗をしながらより良い方法を見つけてゆくしかありません。幸いなことに12月にはほぼ全員が入国でき、その後は対面授業を行いました。約3か月間の非常事態を乗り越えたことで、新たな連携や感謝を感じました。本センターの先生方の御協力に対し、心より感謝申し上げます。

さて、この非常事態の最中でありながら、本紀要には学外から3名の先生方からの御寄稿が掲載されることとなりました。困難な状況の中、御寄稿いただきましたことは本当にありがたく嬉しいことです。教育とともに研究活動を途絶えさせないで済みました。執筆者の皆様にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

このような状況下ではありますが、遠い将来には、世界各国での行き来が以前にも増して盛んになるかもしれないと思うこともあります。なぜなら、私たちが教えている留学生の眼は、以前と変わらず好奇心で満ち溢れているからです。本学での日本語教育が諸外国と日本との「懸け橋」につながっていくようにとの願いは、今回の感染症によって覆ることはありません。引き続き、学習者の個性や可能性を尊重して、その成長に寄与するものでありつづけるために、努力を惜しまず邁進していきたいと思えます。

最後に、本号の刊行にあたってさまざまな形で御支援をいただいた方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

令和3年5月30日

